音楽をめぐる政治学（上）

―― 札幌コンサートホール Kitara とパイプオルガン ――

浅　野　一　弘

目次

1．はじめに
2．札幌コンサートホール Kitara の概要
3．札幌コンサートホール Kitara 建設・パイプオルガン設置決定の要因
（1）札幌交響楽団と PMF の存在（以上，本号）
（2）STP と札幌市音楽専用ホール・オルガン設置期成会の存在
（3）北海道新聞社の存在
4．結び

1．はじめに

『オルガンの芸術―歴史・楽器・奏法―』によると，「日本全国で1970年から2015年のあいだに，キリスト教会に約500台（多くが小型），学校関係で約130台（多くが中型），音楽ホールに45台（多くが大型），そのほかに，これら以外の諸施設に数十台のオルガンが設置された」という。しかも，コンサートホールだけにかぎって，パイプオルガンの設置年を時系列でみると，「1973年の NHK ホールから2013年の那須野が原ハーモニーホールまでの40年間の分布」のうち，「中央の1990～1991年に７台というピークがある」ようだ。ここで，「オルガンが発注から納入までに３～４年はかかることを考慮すると，日本経済のバブル

期（1986-1990）とその崩壊期（1991-1993）に関係があること」がわかる[1]。

このバブル経済のころに設置のきまったパイプオルガンをめぐって，2020年７月３日の『朝日新聞』の夕刊に，「『大型パイプオルガン譲ります』 兵庫・伊丹市，維持費高く 『家具じゃない』音楽関係者ら批判」という見出しの記事が掲載された[2]。記事によると，兵庫県伊丹市が，パイプオルガンを「バブル景気の余韻があった1993年，７千万円をかけて市の施設に設置したが，維持・修繕費が高く手放すことになった」ようで，「『大型のパイプオルガン譲ります！！』と，希望者を探している」ということである。市の施設というのは，高齢者福祉施設「伊丹市立サンシティホール」のことで，パイプオルガンは，「高さ約７メートルで，パイプは1696本。ベルギー・ハッセルト市と姉妹都市関係にある伊丹市が，同国のメーカーに依頼し，ホールの形や日本の気候に合わせて造らせた」ものである。今回，「市は譲渡先について，当初は利用計画などを審査して決める『公募型プロポーザル方式』で募ったが応募はなかった」という。そのため，「６月から随時募集に切り替え，SNS などで発信しているが，具体的に話が進んでいるところはない」ようだ。

ちなみに，このホールはいわくつきで，1991年４月20日の『読売新聞』では，「異色の建築家，ガウディ設計の聖家族教会（スペイン・バルセロナ）をほうふつさせるデザイン―とのふれ込みで，兵庫県伊丹市が昨春オープンさせた多目的ホール『サンシティホール』（同市中野西一）が，音響設計を無視していたため，高い天井の下の残響時間が平均的音楽ホールの三倍を超える七秒に達し，音楽効果をめぐる悪評が続出。市は千二百万円をかけ，二十日までにシャンデリア型の吸音装置を取り付け，残響時間を四秒に縮めた」と報じられていた[3]。

同市のパイプオルガンをめぐっては，「市がこれまで大規模修繕をしてこなかったことや，定期点検・修繕を任せてきた業者がパイプオルガンの専門ではなかったことなど，管理を疑問視する声もあった」ことに留意する必要がある。ところで，地方自治体の予算は無尽蔵ではなく，歳出に優先順位をつけていくことは当然である。にもかかわらず，パイプオルガンを購入する段階で，同市は，「パイプオルガンは定期的なメンテナンスに加え，15～20年に１回，大規

模修繕が必要とされる」ことを認識していなかったのであろうか。伊丹市のケースでは，パイプオルガンの製作者＝ギド・シューマッハが同ホールを訪れ，「『抜本的清掃と大規模修繕が必要』と提案した」ものの，その費用として，「約２千万円かかるため市は踏み切らなかった」という経緯もある[4]。

このように税金で設置されたパイプオルガンが“厄介者”あつかいされている一方で，「パイプオルガン，25年ぶり修理へ　所沢市，文化施設へ寄付募る」との見出しの記事もある[5]。当該記事によれば，「改修中の所沢市民文化センター『ミューズ』に設置されている大型パイプオルガンが来年１～３月，1993年の開館以来初めてオーバーホール（分解点検修理）に入る。耐震補強も予定され，市は趣旨に賛同する市内外の人たちからの『ふるさと応援寄付』を募っている」とのことであった。もっとも，「寄付は財源の一部に充てる」ものの，「市は今年度予算にオーバーホールの費用約2100万円を計上」していた。最終的に，「費用約2100万円のうち219万7500円は，趣旨に賛同した市内外の人の『ふるさと応援寄付（ふるさと納税）』が充てられた」そうだ[6]。

パイプオルガンをめぐる伊丹市と所沢市の対応のちがいは，注目にあたいする。この背景には，芸術文化に対する首長の意識，音楽への地域住民の思い入れの差が影響しているのかもしれない[7]。ここで留意しなければならないのは，公立の音楽ホールの場合，パイプオルガンの購入には税金がもちいられているという根本的な事実である。

ところで，政治学者の草野厚は，著書『癒しの楽器パイプオルガンと政治』のなかで，「あまり身近にはない希少資源であるオルガンという楽器から，日本の政策過程を含めた政治行政の仕組みや社会風土のもつ特徴や問題点が観察できる」という，きわめて興味深い指摘をおこなっている。同書において，草野が訴えているのは，「そもそも，公共ホールにオルガンを設置することが，どうしても必要だったというケースはあまりなかった」という事実である。しかも，「市長や知事といった人の趣味や，あったほうが見栄えがするという理由が平均的であった」こと，「隣接県のホールが設置しているので，うちにも『あって当然』という意識も，なくはなかった」ことも力説する[8]。

こうしたなかで，草野は，「例外的」な事例とはしつつも，「宮崎県や札幌市では，民間からの寄付，一般市民の募金もおこなわれてはいる」と記している。とりわけ，札幌市のケースでは，「市民レベルで，オルガンへの理解を求める普及運動が，次第に規模を拡大する形で（百名から五百名規模に）続き，オルガン購入を草の根で支えた」というのだ[9]。くわえて，北海道新聞社・文化事業部長の前川公美夫も，札幌コンサートホール Kitara の場合，「オルガンは当初の計画にはなかったのだが，市民運動が設置を促した」と断じている[10]。

はたして，Kitara のケースでは，住民の声が大きな推進力となったのか。その事実を明らかにするのが，本論の目的である。論述の順序としては，まずはじめに，Kitara の概要について紹介する。つぎに，Kitara 建設とパイプオルガン設置にいたるまでのいくつかの要因について，おのおの検討したい。ここから明らかとなるのは，『北海道新聞』という存在の大きさである。そして最後に，Kitara の今後について簡単な私見を述べてみようと考えている。

2．札幌コンサートホール Kitara の概要

Kitara のホームページをみると，「1997年７月４日，札幌コンサートホール Kitara は，市民の憩いの場として親しまれてきた中島公園に誕生しました」とある。同ホールのこけら落としは，「国際都市札幌にふさわしい音楽の殿堂を，という声に応え，建設構想策定から６年目の夏」のことであったという。また，「Kitara という名前には，ギリシャ神話の音楽神アポロンの楽器『キターラ』と『北』の意味」の両方がかけあわされているそうだ[11]。ちなみに，Kitara の設計をになった北海道開発コンサルタント（現・ドーコン）の宮部光幸によれば，「Kitara の意匠には札幌の歴史を語るものを取り込んでいます」とのことで，「例えば，大ホール入口のドーム状の天蓋は，1918（大正７）年に中島公園で開かれた開道50年記念北海道博覧会の奏楽堂の引用」であるようだ。このように，「Kitara には，そうした時代の札幌を記すようなモチーフがイコン（記号）として配置されている」のも特徴という[12]。

さて，『令和元年度　さっぽろの文化行政』によると，「札幌市の音楽文化の

中核施設として平成９年７月４日にオープン」したKitaraは，「楽器の生の音を最大限に引き出せるように音響設計された世界水準のコンサートホールであり，アリーナ型の大ホールとシューボックス型の小ホールの，２つの異なった個性のホールを備えている」ようである。そして，「優れた音響環境での演奏会を楽しむことができるよう，全公演にチケットテイク，クローク，座席への案内等を専門に行うレセプショニストを配置したこと」を「特徴」とうたっている。2,008席からなる大ホールは，アリーナ型ワインヤード方式を採用しており，４管編成のフルオーケストラ（120人）まで対応することが可能となっている。伝統的なシューボックス型オープンステージの小ホールのほうは，客席数が453席で，室内楽から30人編成程度の小編成オーケストラの演奏までは対応可能とされる(13)。

Kitaraのホームページでは，大ホールについて，「まばゆいばかりのシャンデリアに浮かびあがる巨大な音響反射板。北海道の木材加工技術の粋を集めた，ダイナミックで美しい曲線の客席と壁面。そしてシャープなラインや鋭角をアクセントに取り入れた，ホール正面の大オルガン。それらは，最新の音響設計技術から導かれたフォルムであると同時に，北海道の雄大な大地と針葉樹林をイメージさせ，北の街・札幌にふさわしい洗練されたコントラストを見せています」とあり(14)，もう一方の小ホールに関しては，「室内楽やピアノ，声楽のリサイタル，日本の伝統音楽など，こまやかな音のひとつひとつまで明瞭に味わうことができます」と紹介されている(15)。

コンサートホールにとって緊要な音響であるが，ホームページには，つぎのような記述がみられる(16)。

> Kitaraの音響設計では，コンピューターを駆使して30通りもの初期反射音のシミュレーションをくりかえしてきました。そして試行錯誤すること３年，曲線の反射壁を客席にも設置することで，最高の音響効果を獲得したのです。反射壁には道産のやわらかな木材を使用，緻密な計算に基づいたその曲線は，場所によって異なるカーブを描いています。

さらに，オーケストラが発した音をホール全体に拡散させるため，ステージの上に全体幅17メートルの巨大な音響反射板をつり下げています。従来の反射板は，細分化したアクリル板を使用していましたが，Kitara は軽量コンクリート製の反射板４枚を組み合わせてステージ上部をすべてカバー。世界的にも珍しい試みによって実現したやわらかで重厚な響きは，ワインのように年とともに熟成を加え，世界の名だたるコンサートホールにも肩をならべるときがくることでしょう。

では，この Kitara には，どのようなパイプオルガンが設置されているのであろうか。1997年２月25日からくみたて作業がおこなわれ，４月３日に，「オルガン本体と外側のパイプ約六百本の取り付け作業を終えた」(17)，パイプオルガンは，アルフレッド・ケルン社製で，ストップ数が68，パイプ本数は4,976（装飾パイプ14本をふくむ）ある(18)。ちなみに，子ども用につくられた，「Kitara のパイプオルガンをみてみよう！」という小冊子には，「Kitara のオルガンのパイプの数は…『良く鳴る＝よくなる＝4,976本』と覚えてくださいね」との記述がみられる。さらに，「このオルガンで一番長いパイプは約７メートルもあり，低い音を出します。一番短いパイプは約１センチで，とても高い音を出します」とも紹介されている(19)。

パイプオルガンを製作したアルフレッド・ケルン社とは，「オルガニストでもあったシュヴァイツァー博士のすすめによって，アルフレッド・ケルン氏が1953年に創設した名門のオルガン製作会社」で，「フランス・ストラスブールでオルガンの伝統的なスタイルを守る」同社が，「Kitara のために２年の歳月をかけて製作した」パイプオルガンについては，「やわらかな銀色に輝くパイプは鉛とすずの合金で，北海道の針葉樹林をモチーフとしたデザインがほどこされ，凛とした美しさをたたえています」とされている。このパイプオルガンの設置と整音作業には４ヶ月を要したという(20)。ちなみに，Kitara の初代館長に就任した松前紀男は，「Kitara のオルガン成功の理由は第一に，アルザスのケルン社のものを選んだこと。パイプオルガンと一口にいってもさまざまで

すが，大きくは北ヨーロッパ，中部ヨーロッパ，イタリアなどに性格が分かれます。アルザスを含む中部ヨーロッパ系のオルガンは幅広い表現力と色彩豊かな音色が特徴。教会用ではなくホール用オルガンとしてはベストの選択だったと思います」と述べている[21]。なお，Kitara には，大リハーサル室のなかに，カール・シュッケ社（ドイツ）製のストップ数９，パイプ本数464のものが，さらに小リハーサル室 A には，オーバーリンガー社（ドイツ）製のものがそなえられているそうだ[22]。

また，同ホールのホームページには，「札幌コンサートホール専属オルガニスト」という項目がもうけられており，そこには，「Kitara のシンボル的存在，大ホールのパイプオルガンの魅力を広く深く活用し，世界へ向けて発信する札幌コンサートホール専属オルガニストを，ヨーロッパより毎年招聘しております。これまで21人の若く才能豊かなオルガニストを迎えました。彼らは一年間 Kitara での専属オルガニストとしての活動をきっかけに大きく成長し，魅力あふれる音楽家として羽ばたいてゆきました。現在の専属オルガニストと，世界各地で活躍する歴代のオルガニストたちをご紹介します」とある[23]。初代のパスカル・マルソー（任期：1998年９月～1999年８月）はフランス出身で，「トゥール大学，パリ国立高等音楽院及びアムステルダム・スヴェーリンク音楽院において音楽を学び，オルガンをミシェル・ブヴァール，オリヴィエ・ラトリーに師事」した人物であった[24]。21代目となるアダム・タバイディ（任期：2019年９月～）はハンガリーの生まれで，「2011年よりリスト音楽院にて，ザボ・バラージュ，ルッペルト・イシュトヴァーン，パールウール・ヤーノシュ，ファッサン・ラスロにオルガンを師事」した経歴を有する人物である。ちなみに，これまでの専属オルガニストの出身国をみると，フランス：９，ハンガリー：２，ベルギー：２，ポーランド：２，イタリア：１，スペイン：１，スロヴァキア：１，ドイツ：１，米国：１，ルーマニア：１となっており，かたよりがあることがわかる[25]。これは，「キタラのオルガンを維持する上で大切なのは，フランス製のオルガンの魅力を最大限に引き出すことです。その方法として考えたことが，フランスから若くて意欲的なオルガニストを呼ぶこと

でした」との認識が色こく反映された結果といえよう[26]。

Kitaraの特色として，関係者の一人である藤垣秀雄（札幌市役所）は，「完璧にフラットな床面。大小19室の楽屋。３つのサロン。記者会見のスペースを共有する２つの楽屋。大型の台車が余裕をもって交差できる廊下幅。効率性を徹底した平面プラン」などをあげる。こうした「キタラ独自の舞台裏が誕生」することとなった背景には，「『演奏者を第一に考えること。それが世界レベルのホールをつくる。』という仮説」があるようだ。そこには，「演奏会の質を左右するのは演奏者です」との意図があり，そうした事実を「過去のホールが見落としてきた」点に着目したというのである[27]。

このKitaraの管理運営にあたるのが，公益財団法人　札幌市芸術文化財団である[28]。同財団は，札幌市の指定管理者として，Kitara以外に，「札幌芸術の森」「本郷新記念札幌彫刻美術館」「札幌市教育文化会館」「札幌市民ギャラリー」「札幌市民交流プラザ（札幌文化芸術劇場及び札幌文化芸術交流センター）」といった文化施設の管理・運営をおこなっている。ホームページによれば，「市民をはじめ，内外の文化団体，芸術家，芸術事業関係機関と密接なネットワークを構築し，札幌市民の芸術文化の普及，振興に取り組んでおります」とのことだ[29]。ちなみに，同財団の代表理事（理事長）は札幌市長・秋元克弘がつとめているが，専務理事のポストには，前・札幌市下水道河川局長の渡邉多加志が就任している[30]。なお，2019年４月17日時点で，同財団には，事務職員：８（部長職：２，課長職：３，係長職：３）と技術職員：１（課長職：１）の計９人が札幌市から派遣されている[31]。

同財団の「令和２年度　事業計画書」には，「令和２年度目標」として，大ホールの利用率を87.0％，小ホールの利用率を77.3％とすることが明示されている。同事業計画書にあげられている「平成30年度実績」がおのおの83.9％，71.9％であることを考えあわせると，この目標値が若干たかめであるような印象を受ける（「令和元年度見込」はおのおの83.2％，68.0％となっている）。しかも，同事業計画書には，「令和２年11月２日～令和３年６月30日，特定天井改修工事，設備機器改修等のため休館予定」とも記されている[32]。もっとも，これ

は，「札幌コンサートホール Kitara は，1997年の開館から22年が経過しており，天井の補強工事や設備機器の改修等」のメンテナンスの必要性から不可避のものである[33]。ところが，ここに，“数字のマジック”がある。ここでいう利用率とは，「分母を『利用可能日数』としている」ものであって，「工事に伴う開館日数減少の影響を受けない」こととなっている[34]。そのため，こうしたたかめの数値が設定可能というわけだ。そこで，総入場者数に着目すると，「平成30年度実績」が34万3,888人であるのに対して，「令和２年度目標」が21万人となっている[35]。

３．札幌コンサートホール Kitara 建設・パイプオルガン設置決定の要因

（1）札幌交響楽団と PMF の存在

地元の『北海道新聞』に Kitara の文字がはじめて登場したのは，1995年３月21日のことであった[36]。

札幌市が中央区の中島公園内に建設中の市音楽専用ホール（仮称）の愛称が，市内東区の音楽講師内村直子さん（25）が応募した「Kitara」（きたら）に決まり，二十日，市役所で愛称の発表と表彰式が行われた。

市が公募していたもので，道内外からの二千九十五点から，市内の音楽家らで構成する愛称選定委員会（横谷瑛司委員長）が選考。「Kitara」は古代ギリシャの楽器で，「北」や「来たら」というイメージにも広がるなど，語感や親しみやすさが受賞の理由になった。

桂市長から表彰状を手渡された内村さんは「自分の考えた名前がずっと残ることが一番うれしい。いつか自分もこのホールで演奏できるように努力します」と話していた。副賞の十万円は，音楽の勉強に利用するほか，一部を阪神大震災の被災地に寄付するという。

では，この Kitara ＝札幌コンサートホールは，どのような経緯で誕生した

のであろうか。その最大の要因は，当時の時代状況にあったといえよう。Kitaraの誕生にかかわった板垣昭彦（札幌市役所）によれば，「『素晴らしい響きの専用ホールで音楽を聞きたい』という市民の長年の夢を叶えたこのホール建設の発端は，八年前（1989年）に遡る。当事国内では余暇時間の拡大や日本経済の繁栄など，社会経済面での変動を背景として，人々の意識が『物質的な豊かさ』より『こころの豊かさ』を重視する方向へ転換する時期にあった。地方公共団体の施策においても，『こころの豊かさ』の尺度とも言える芸術文化行政の比重が重くなり，全国的に美術館や音楽・演劇の専用ホールなど芸術文化施設の建設ラッシュが始まっていた」（カッコ内，引用者補足）のだ[37]。当時，札幌市のなかで，こうした動きにとりのこされることのないようにしなければならないとの思いがあったことは，想像に難くない。

また，ある著書には，「ホール建設機運が盛り上がった時点で，札幌にはすでに札響とPMFがあったという事実は大変に大きな意味をもっている」との記述がみられる[38]。現に，Kitaraの「事務所部分にはキタラの管理部門のほか札響事務局，PMF事務局も入り，札幌の音楽を担う中枢となっている」ことが，この指摘を裏づけているのかもしれない[39]。

さて，ここでいう札響とは，札幌交響楽団のことで，「1961年7月1日『札幌市民交響楽団』の名称で発足」した団体である。9月6日に，初代常任指揮者・荒谷正雄のタクトのもと，第1回定期演奏会を開催している。同楽団のホームページによると，「1985年に黒澤明監督の映画『乱』（武満徹作曲）の音楽を担当したことで札響の名が全国に大きく知られるきっかけもつくった」ようだ。さらに，ホームページでは，「2011年5月には，札響創立50年を記念したヨーロッパ演奏ツアーとして英国のロンドン，ドイツのミュンヘン，デュッセルドルフ，イタリアのミラノ，サレルノの3カ国5都市で公演，各地で絶賛を博し，今や札響が日本を代表するオーケストラのひとつであることを証明した」とある。なお，「2018年4月から首席指揮者にスイスの名指揮者マティアス・バーメルトが就任。尾高忠明名誉音楽監督，広上淳一友情客演指揮者，そして指揮者に松本宗利音」のもと，ハーモニーにみがきをかけているという[40]。

2019年度には，「交響楽団としての出演回数は合計113回，練習日数107日」で，さらに，「この他小編成による教育や福祉関係の活動」も53回ある。そのため，「交響楽団として移動日等も含めての稼働日数は224日」におよんでいる。ちなみに，楽団員の数は75名である[41]。なお，2019年11月末に，「通算21年と７か月の長きにわたりコンサートマスターを務め，演奏会の際に限らず常に札響の顔として札響とファンをつないできた存在」であった大平まゆみが，難病のため，退団したことは記憶にあたらしい[42]。

この札響が，「年間約100回にのぼる公演のうち半数は札幌市以外での演奏会や音楽教室に割かれ，広く北海道全体に生の演奏を聴く機会を広める」活動をしてきたことが，Kitara 建設推進の土壌としてあったというのである[43]。とはいえ，Kitara 開館当時，札響・首席指揮者の任にあった秋山和慶によると，「最初は，札響に，すべてではないけれど優先権を与える，ということでした。ところが実際は，使用料に段階があり，札響は練習に使っても最も高い区分の料金を払わなければならない」とのことであった[44]。こうしたマイナスの側面はあったものの，「Kitara の誕生は，いうまでもなく札響の針路にとっても重要な意味を持っていた」ことはまちがいなかろう[45]。

つぎに，もう一つの PMF についてみてみよう。PMF とは「パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌」のことで，「1990年，『ウエストサイド・ストーリー』の作曲者として知られる世界的な指揮者，レナード・バーンスタイン（1918～90）が，ロンドン交響楽団とともに札幌で創設した国際教育音楽祭」をさす。同音楽祭は，「これまで約30年にわたり，世界77ヵ国・地域に延べ3,600人以上の優秀な音楽家を輩出し，未来のクラシック音楽シーンを担う人材の育成に貢献」してきたとされる。現在，「PMF は，タングルウッド音楽祭（アメリカ），シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭（ドイツ）とともに『世界三大教育音楽祭』のひとつ」に数えられるまでになったという[46]。

ちなみに，この PMF はもともと札幌で開催される予定ではなかった。当初，創設者のレナード・バーンスタインが考えていたのは，北京であった。関係者によれば，「バーンスタインとマネージャーのハリー・クラウトは，一九八六

年に北ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタインで教育音楽祭をはじめました。八七年ころからは，次はアジアで，ロンドン響（LSO）と何かをしたいと考えていたんです。それがしだいに，北京と上海で教育音楽祭と作曲家会議をやろう，ということになっていった」そうだ[47]。そうしたなか，1989年6月4日に，天安門事件が発生し，北京での開催が困難となる。そこで白羽の矢がたったのが，札幌であった[48]。だが，当初，札幌市役所は二の足をふむどころか，この構想にまったく関心を示さなかったという。その背景には，「'89年に行われた“食の祭典”失敗の影響等もあって大々的な催物への協力には消極的な姿勢であり，特に音楽事業へは責任ある判断基準を持たない」という事情があった[49]。この「当時生活文化部の部長で，その後PMFを札幌市側で支える田熊勉」によると，「（八九年）七月六日に市長（板垣武四）に説明しました。しかしこのとき，こっぴどく怒られたんです。東京から持ち込まれたそんなうさんくさい話を俺のところに持ってくるな」といった具合であったそうだ。だが，その後，PMFへの「野村証券とNHKの後押しが明らかになり，さらに音楽や国際事情にくわしいブレーンが，市長を説得した」ことで，札幌での開催にこぎつけたというわけである[50]。

札幌が候補地とはなったものの，「札幌市には，1986年から整備を進めている途中の『芸術の森』しか対応できる場所はなかった」。しかも，「『芸術の森』は15年計画で滞在型の芸術村を建設する予定」であり，「当時は音楽ホールはおろかコンサートができるような施設は何もなかった」のだ。ところが，「音楽祭のオーガナイザーは『芸術の森』を見て大変に気に入った」ようで，「そこで将来計画にあった屋外ステージを急遽建設することで，PMF音楽祭は突然降って沸いたように札幌で行なわれることになった」という[51]。しかしながら，「六月二十六日から十九日間，PMFオーケストラの三回の公演を軸に，五十あまりのコンサートが行われた」第1回のPMFでは，「チケットも十分には売れなかった」らしく，「LSOと五嶋みどりのコンサートは発売日の午前中に完売したものの，よかったのはそれだけ」で，「札幌市民会館でバーンスタインがPMFオーケストラを振った演奏会でさえ，空席が目立った」そう

だ[52]。これこそが，札幌の音楽事情の実態なのである。にもかかわらず，この札幌の地に，コンサートホールが建設されることとなる。しかも，Kitaraの開設時，「市は，札幌を中心に，小樽，苫小牧など道央圏から年間三十七万人が訪れ，赤字は年間五億円程度と試算した」ものの，「音楽人口が道央圏の比ではない首都圏のホールでさえ，十億円近い赤字を計上している」との地元紙の指摘もあった[53]。

そうしたなか，「札幌市が本気でコンサートホールの建設を検討し始めたのは，1990年頃とされている」。ここには，札幌でおこなわれた第1回のPMFが，「会場の手当てに手こずり，市内だけではまかなえずに一部を千歳で開催することとした」事情も関係しているものの[54]，この当時，「全国各地で同様の機運が高まっていたが，札幌でも，札幌シアターパークプロジェクト（STP）などの市民団体が，強力にそれを推進する活動をおこなっていた」ことも影響しているようだ。こうした動きにくわえて，コンサートホールの建設の声が，「PMFを目の当たりにして勢いづいたのは想像に難くない」との声もある[55]。それが，「八〇年代から活動していた，『札幌に音楽専用ホールを』と願う市民運動がPMFのスタートによって大きな追い風を得て，理想的な形で夢をかなえた」とする，『奇跡の音楽祭　札幌・PMFの夏』の著者・谷口雅春の指摘にもつながる[56]。

だが，先述したように，第1回PMFに対する札幌市民の関心度とてらしあわせると，はたしてそのように断じることができるのであろうかという疑問が生じる。むしろ，「PMFという世界的イベントを開催する政令指定都市でありながら，そのための立派なうつわがないのはみっともない」といったレベルの話でしかなかったのではなかろうか。いずれにせよ，このPMFの存在がKitaraの建設に影響をおよぼしたことだけはまちがいないようだ。その証左に，前出の宮部は，「PMF自体が暮らして演奏するというスタイルですから，その核としてホールを作る」ことを念頭においていたと述懐しているし[57]，「本道初の音楽専用ホールの基本構想が二十九日，決まった」と報じた，1993年3月30日の『北海道新聞』の夕刊をみても，「平成九年のパシフィック・ミュー

ジック・フェスティバル（PMF）までにオープンする」とあり，PMF と Kitara が不可分の関係と考えられていたことがわかる[58]。現に，「PMF-20 Years」という冊子のなかでも，「この年（1997年），念願だったクラシック専用ホール，札幌コンサートホール Kitara がオープンし，PMF のメイン会場のひとつとなった」（カッコ内，引用者補足）ことで，「PMF にとって環境面が充実した年となった」との文言がみられる[59]。

ここで，PMF と札響との関係について，「札幌に音楽専用ホールができて札響がそこを牙城（がじょう）に活動を進めていくとしたら，札響とのジョイント企画など北海道全体でいろいろな形でのバックアップを考えていかねばならない」との意見もあるものの[60]，「PMF の創設期には，両者は札幌の音楽ファンをハラハラさせる緊張関係にあったことも事実だ」と指摘するむきもあることを付言しておきたい[61]。なお，この点については，『札幌交響楽団50年史―1961-2011―』においてもふれられており，「PMF は道都の文化事業の核として成長していくが，開始のときの齟齬から生まれた札響との不協和音はしばらく尾を引いた」とある[62]。

さて，「豊平墓地跡地も候補地に挙がっていたが，既存の豊平館などを含めて中島公園を『歴史・芸術文化ゾーン』として再整備すべきとする意見が強まっていた」なか，札幌市長・桂信雄は，「新設する音楽専用ホールの建設地について『中島公園内がふさわしい』との考えを明らかにした[63]。また，同市の基本計画では，「５管編成130人のオケが上がるオルガン付きのステージがあり，２千人の客席に心地よく音が届くことが最低条件」であった[64]。そして，「1992年に６社による札幌コンサートホールの指名コンペが行なわれた。その要項には，大ホールはアリーナ型で2000席，小ホールはシューボックス型で450席とされた」そうだ。「札幌市では初めての設計コンペ」をあとおししたのは，前出の「STP など市民からの強い要請」であったという[65]。

STP とは，「札幌交響楽団の定期会員や音楽団体，演劇団体などを母体」とした団体である[66]。この「STP（さっぽろシアターパークプロジェクト＝代表幹事・山科俊郎北大工学部教授）は九〇年に発足」し，「『さっぽろに創（つく）ろう，

芸術音楽シアターパーク』を合言葉に署名や募金，シンポジウムなどを展開し，市当局にも粘り強く働きかけてきた」[67]。代表幹事の山科俊郎によれば，「スタッドレスタイヤ推進運動でそのノウハウを学んだ」そうだ[68]。ちなみに，「札幌では88年，コンサートホール建設運動の母体として北海道音楽団体協議会が発足」し，毎月勉強会をひらいてきたが，「90年に協議会はホール建設を目指すさっぽろシアターパークプロジェクト（STP）に衣替え」をすることとなった。そのSTPが，「わずか2カ月で6万人分の署名を集め，板垣武四札幌市長に陳情書とともに手渡し」[69]，Kitara建設をあとおしするかたちとなった。このSTPは，「北の文化とまちづくりフォーラム」やフェスティバル「交響詩札幌」を主催するなど[70]，積極的な活動を展開してきた。後者のフェスティバルでは，「一九九〇年の発足以来行ってきたホール建設というハード面の活動だけでなく，若手育成などソフト面の活動を進めよう」との思いがあったようだ[71]。

ところで，このSTPの副代表についたのが，札響事務局長・竹津宜男である。竹津は，「この質の高いホールをつくったのは，建築設計を担当した宮部光幸さんと音響設計をした豊田泰久さんです」と断言する。先述したように，宮部はKitaraの設計をになった北海道開発コンサルタントの人物で，「1970年代，『札幌の文化を考える』運動を始めた札幌青年会議所の活動に建築家としてかかわっていました」とのことだ。その宮部は，「札幌のアイデンティティーは札響（札幌交響楽団）だ」と訴え，事務局長であった竹津を勉強会にひきこんだという。勉強会の成果か，「青年会議所はまず，札響を中心とした文化の創造と研修の場として『札幌芸術の村』構想を札幌市に提案」する。それを受けて，「86年に『札幌芸術の森』がオープンし，札響が優先使用できる練習場ができました」とのことだ。もう一人の豊田泰久は，サントリーホールの音響設計をにない，Kitaraの音響設計も担当した人物である[72]。

だが，建築家の井口直巳は，「新しいコンサートホール建設の原動力となっていく」人材として，これまでに登場した，竹津，板垣，藤垣の3名をあげている。なぜなら，「1990年に札幌市の市民文化課にホール準備室が置かれた」

折り，主査となった板垣は，「その前年まで札幌市の東京事務所に勤務し，その間は音楽会に通い詰めたという音楽愛好家であった」し，藤垣のほうは，「1977年の東京国際ギターコンクールで優勝しスペインにも留学したという，市の職員としては異例の経歴の持ち主」であったからだ(73)。

いずれにしても，こうした人材にめぐまれたこと，さらには，札響，PMFといったアクターによって，Kitara は誕生するのである(74)。ただ，ここで忘れてならないのは，「ホールの基本構想はバブル経済の余韻が色濃い一九九一年年度に策定され，九四年度に着工した」ためか，「正面玄関などのホールの床や壁，外壁の一部に天然大理石がふんだんに使われていた」こと，さらには，「総事業費百九十一億円のうち，百億円は市の借金・市債の発行でねん出」し，「二〇一七年度までかかる借金の金利を含めた総額は実際には二百五十億円前後に達し，これらは市民や国民の税金でまかなわれる」という事実である(75)。

（次号へつづく）

（1）日本オルガニスト協会監修，松居直美・廣野嗣雄・馬淵久夫編『オルガンの芸術―歴史・楽器・奏法―』（道和書院，2019年），329頁。
（2）『朝日新聞』2020年７月３日（夕），11面。
（3）『読売新聞』〔大阪版〕1991年４月20日（夕），12面。
（4）『朝日新聞』2020年７月３日（夕），11面。
（5）同上〔埼玉首都圏版〕2019年７月25日，25面。
（6）同上〔埼玉全県版〕2020年７月16日，24面。
（7）もっとも，伊丹市立サンシティホールでは，20人定員とはいえ，これまで「夏休み恒例のパイプオルガン体験教室の参加者を募集」するなど，住民とパイプオルガンの距離感を縮めようとのこころみがなされてきたことも事実である（『読売新聞』〔阪神版〕2019年６月17日，29面）。
（8）草野厚『癒しの楽器パイプオルガンと政治』（文藝春秋，2003年），８頁および118頁。
（9）同上，73頁および118-119頁。
（10）前川公美夫「オープニングに身を置いて」さっぽろ文庫編集室編『さっぽろ文庫第84巻―中島公園―』（札幌市，1998年），59頁。

(11) https://www.kitara-sapporo.or.jp/about/index.html（2020年８月15日）。
　なお，Kitara の起工式は1994年９月６日におこなわれている（『北海道新聞』1994年９月７日，29面）。
(12) 宮部光幸「インタビュー　Kitara の設計と札響」『札幌交響楽団50年史―1961-2011―』（札幌交響楽団，2011年），110頁。
(13) 札幌市市民文化局文化部編『令和元年度　さっぽろの文化行政』（https://www.city.sapporo.jp/shimin/bunka/gaiyo/documents/03_r1_3shisetu.pdf〔2020年８月15日〕），31頁。
　なお，「一九九七年七月のオープンに向け，工事が全体の四割まで進んでおり，道内最大の音楽ホールの骨組みが徐々に現れつつある」なかの1995年９月19日までに，「札幌コンサートホール」という正式名称がきまったそうである（『北海道新聞』1995年９月20日，29面）。
(14) https://www.kitara-sapporo.or.jp/facility/mainhall.html（2020年８月15日）。
(15) https://www.kitara-sapporo.or.jp/facility/smallhall.html（2020年８月15日）。
(16) https://www.kitara-sapporo.or.jp/facility/acoustic.html（2020年８月15日）。
(17)『北海道新聞』1997年４月４日，１面。
　ちなみに，「欧州では，公共ホールの開館に合わせて，オルガンを完成させるというような慌しいことはしないらしい」（草野，前掲書『癒しの楽器パイプオルガンと政治』，138頁）。
(18) https://www.kitara-sapporo.or.jp/facility/organ.html（2020年８月15日）。
　「当初，ケルン社から提出されたオルガンデザインには３種類のスケッチがあった」という（木下孝「札幌コンサートホールの設計― Kitara 誕生秘話―」ドーコン叢書編集委員会編『ドーコン叢書②　エンジニアの新発見・再発見―北海道を見つめなおす13の視点―』〔共同文化社，2012年〕，158頁）。
(19)「Kitara のパイプオルガンをみてみよう！」，３-４頁。
(20) https://www.kitara-sapporo.or.jp/facility/organ.html（2020年８月15日）。
　パイプオルガンが完成したのは，1997年６月14日であった（『北海道新聞』1997年６月15日，29面）。
(21)「未来へ奏でる Kitara の響き―札幌コンサートホール館長対談集―」（2002年），74頁。
(22) https://www.kitara-sapporo.or.jp/facility/rehearsal.html（2020年８月15日）。
(23) https://www.kitara-sapporo.or.jp/about/organist/index.html（2020年８月15日）。
(24) https://www.kitara-sapporo.or.jp/about/organist/organist_01.html（2020年８月15日）。
(25) https://www.kitara-sapporo.or.jp/about/organist/index.html（2020年８月15日）。
　パイプオルガンの「専属奏者の配置は，札幌・オルガン設置期成会も強く要望」していたようだ（『北海道新聞』1995年５月29日〔夕〕，５面）。
(26) 藤垣秀雄「キタラ物語」（2009年），３頁。

(27) 同上，15-16頁。

(28)「南区の芸術の森の運営主体として八六年に設立」された，財団法人・札幌芸術の森（理事長＝桂信雄・市長）は，「音楽専用ホールも『貸し館業務やコンサート開催といった自主事業には，専門的なノウハウが必要』（市民局）」との判断から，Kitaraの運営の委託を受けることとなった（『北海道新聞』〔道央版〕1994年７月21日，22面）。ちなみに，同財団が札幌市芸術文化財団に衣がえしたのは，「芸術文化事業の一元化を図るとともに，市職員の派遣を減らし運営をスリム化する」との理由からで，札幌市教育文化財団との合併（1999年４月１日）によってである（同上〔地方版〕1999年３月11日，24面）。

(29) http://www.sapporo-caf.org/（2020年８月15日）。

(30)「公益財団法人札幌市芸術文化財団　役員名簿」（http://www.sapporo-caf.org/pdf/r02Meibo.pdf〔2020年８月15日〕）。

(31) 札幌市市民文化局文化部編『令和元年度　さっぽろの文化行政』（https://www.city.sapporo.jp/shimin/bunka/gaiyo/documents/01_r1_1.pdf〔2020年８月15日〕），３頁。

(32) 公益財団法人札幌市芸術文化財団「令和２年度　事業計画書」（http://www.sapporo-caf.org/pdf/2020Jigyo.pdf〔2020年８月15日〕），29頁。

(33) https://www.kitara-sapporo.or.jp/news/whatsnew.php?num=367（2020年８月15日）。

(34) 関係者の電子メールによる回答（2020年７月22日）。

(35) 公益財団法人札幌市芸術文化財団，前掲「令和２年度　事業計画書」，29頁。

(36)『北海道新聞』〔道央版〕1995年３月21日，27面。

なお，このKitaraという名称については，「しゃれていると言われれば，そうかもしれない」が，「何となく安っぽく感じてしまうのは，私が時代遅れだからだろうか」とする「＜読者の声＞公共施設の愛称安っぽさ感じる」（投稿者：札幌市北区）が地元紙に掲載されたことを紹介しておく（『北海道新聞』1997年９月25日，７面）。

(37) 板垣昭彦「構想・優れたホールを目指して」さっぽろ文庫編集室編，前掲書『中島公園』，49頁。

1997年５月に策定された「アンビシャス札幌・21―札幌市芸術文化基本構想―」のなかでも，「人々の関心は，余暇時間の増大や価値観の転換とともに，自然との共生や環境への配慮を含めた『心の豊かさ』の充実という，個性的で本質的なものへと移りつつあります」との認識が示されている（札幌市市民局文化部編「札幌市芸術文化基本構想」〔1997年〕，４頁）。

(38) 宮部光幸・藤垣秀雄＝聞き手・井口直巳「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編『音楽空間への誘い―コンサートホールの楽しみ―』（鹿島出版会，2002年），207-208頁。

「PMFに当初から関わりホールの建設を担当して後に札幌コンサートホールのプロデューサーになる藤垣秀雄」も，「乱暴な言い方をすると，札幌交響楽団がまず唯一のプロオーケストラとして多くの時間をかけて市民に音楽を普及した。PMFが一

気に意識を，そしていきなり世界と結びつけ，東京でもできないようなことをこの札幌がやり始めた。その２段階のどちらが欠けてもコンサートホールはできなかったと思います」と，当時をふり返っている（同上，208頁および212-213頁）。

(39) 前川，前掲論文「オープニングに身を置いて」さっぽろ文庫編集室編，前掲書『中島公園』，59頁。

(40) https://www.sso.or.jp/sso/profile/（2020年８月15日）。

もともとは，「（昭和）三十四年八月末，札幌市文化会議の発議で市民オーケストラ設立の運動が始まった」（カッコ内，引用者補足）ことを受けて（前川公美夫『北海道洋楽の歩み―ペリー来航から札響まで―』〔北海道新聞社，1989年〕，174頁），「札幌市民交響楽団設立総会が開かれたのが昭和三十六年（1961）六月五日，次いで結団式が七月九日に行われ，ここにめでたく全国で三番目の地方オーケストラが誕生した」のであった。なお，「創立から半年ほどたってから正式に財団法人として認められ，その時“市民”がとれて『札幌交響楽団』と改称した」（永井征男「札幌交響楽団」札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫　第57巻―札幌と音楽―』〔札幌市，1991年〕，68頁および76頁）。

(41)「事業報告書　平成31年４月１日から令和２年３月31日まで」（https://www.sso.or.jp/sso/foundation/upload_img/h31_jigyou_ho.pdf〔2020年８月15日〕），１頁。

(42)「札幌交響楽団　2019年度活動報告」（https://www.sso.or.jp/sso/foundation/upload_img/h31_jigyou_ho.pdf〔2020年８月15日〕）。

(43) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編，前掲書『音楽空間への誘い』，207頁。

(44)『北海道新聞』1997年６月１日，７面。

(45) 前掲書『札幌交響楽団50年史』，109頁。

(46) https://www.pmf.or.jp/jp/about/（2020年８月15日）。

(47) 谷口雅春『奇跡の音楽祭　札幌・PMF の夏』（北海道新聞社，2005年），83頁。

(48) この点については，『北海道新聞』でも，「バーンスタインが当初，開催地に選んだのは中国の北京だった。しかし前年，学生たちの反政府運動が武力鎮圧される『天安門事件』が勃発する。突然の代役が札幌だった」と明記されているが（『北海道新聞』2014年７月14日，１面），じつは，「一般には，PMF は天安門事件の余波で北京開催が札幌になった，とされている。しかしそこに至る前に，主催者側は北京以外での開催の可能性も探っていた」との証言は傾聴にあたいする（谷口，前掲書『奇跡の音楽祭　札幌・PMF の夏』，86頁）。

(49) 森口力「PMF10年史　第１部『その源流から創設期まで』」パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会編「PMF10周年記念誌」（1999年），38頁。

(50) 谷口，前掲書『奇跡の音楽祭　札幌・PMF の夏』，87-88頁。

なお，文中の「野村証券」という表記はあやまりで，ただしくは，「野村證券」である。

(51) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学

会編，前掲書『音楽空間への誘い』，206頁。

なかには，「梅雨がないことだけで札幌を選んだ」との証言もある（『北海道新聞』1990年１月８日，４面）。

(52) 谷口，前掲書『奇跡の音楽祭　札幌・PMF の夏』，98頁。

(53)『北海道新聞』〔道央版〕1997年７月５日，27面。

(54)『北海道新聞』1990年４月16日，４面。

(55) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編，前掲書『音楽空間への誘い』，207頁。

(56) 谷口，前掲書『奇跡の音楽祭　札幌・PMF の夏』，46-47頁。

(57) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編，前掲書『音楽空間への誘い』，210頁。

(58)『北海道新聞』1993年３月30日（夕），12面。

(59) パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会編「PMF-20 Years」（2009年），72頁。

(60)『北海道新聞』1993年６月５日，６面。

(61) 谷口，前掲書『奇跡の音楽祭　札幌・PMF の夏』，43頁。

(62) 前掲書『札幌交響楽団50年史』，99頁。

(63)『北海道新聞』〔地方版〕2002年６月11日，28面。

(64)『北海道新聞』2010年７月22日（夕），３面。

(65) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編，前掲書『音楽空間への誘い』，210頁。

(66) 同上，207頁。

(67)『北海道新聞』〔道央版〕1994年３月15日（夕），８面。

(68)『北海道新聞』1993年６月５日，６面。

「脱スパイク運動」をつうじて，「市に要求して勝ち取ろうという発想ではなく，市民が提案して行政といっしょに作り上げていくノウハウを学んだ」という（『読売新聞』〔札幌版〕1993年１月１日，27面）。

(69)『北海道新聞』2010年７月22日（夕），３面。

(70) 同上〔道央版〕1994年８月24日，25面および1995年４月14日，26面。

(71) 同上，1995年４月27日（夕），12面。

(72)『北海道新聞』2010年７月22日（夕），３面。

(73) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編，前掲書『音楽空間への誘い』，208頁。

(74) ちなみに，前出の STP が策定した「シアターパーク構想」の「音楽専用ホールのコンセプト」の項目をみても，「内外の音楽家が集い，札幌からの音楽を創造する場としてのホール」として，札響と PMF についての言及がなされている。前者については，「札幌交響楽団の活動の中心の場と位置付け，内外のすぐれた音楽家と札幌市民とが，音楽を通じてさらにふれあいを拡げることが可能な場であることをめざす」

と，また，後者に関しては，「PMF のメインホールとして国の内外にその存在を広め，札幌を国際的音楽文化の中心都市のひとつとして位置付ける。さらに音楽家及び市民との交流を深め，音楽芸術を真に札幌発信となるような場とする」と記されている。さらに，「札幌の音楽文化をささえてきたアマチュアの演奏発表の場として位置付け，すぐれた音響効果のホールを持つことによる演奏水準の向上を図ることが可能な次代を担う音楽家の輩出を促す土壌となる側面を持つものとする」との文言があることも紹介しておきたい（「STP の活動記録」編集委員会編「STP の活動記録―1990→1995―」〔1995年〕，31頁）。

(75)『北海道新聞』〔道央版〕1997年 7 月 5 日，27面。